

過類 (jāti) をめぐって ——ディグナーガに至る vāda の伝統の解明への一視点——

代表 小野基 (筑波大学教授)

問題提起

過去 20 年間にオーストリア科学アカデミーと中国蔵学研究中心、わが国の桂紹隆教授グループによるジネーンドラブッディ (8th c.) の Pramāṇasamuccayaṭīkā (= PST) 梵文写本の研究が進み、ディグナーガ (ca. 480-540) の論理学の実像と 5 世紀以前の認識論・論理学の諸相を従来より明確に記述する道が開けてきた。本パネルでは、PST 梵文写本の第 6 「過類 (= 誤難)」章の校訂に従事した 3 人の研究者が研究の最新成果を紹介し、ディグナーガの誤難論の全体像を解明するとともに、ディグナーガ以前の討論術・論理学の伝統がディグナーガの体系に取り込まれてゆく道筋の検討を通して vāda の思想史の解明に新たな一視点を提供することを試みる。

各発表要旨

小野基「『論軌』の過類論に対するディグナーガの批判」

ディグナーガの誤難論の先駆はヴァスバンドウの Vādaśāstra (= VVi; 論軌) の誤難論である。フラウワルナー博士は 1957 年の論文 “Vasubandhu’s Vādaśāstra” で、Pramāṇasamuccayaṭīkā (= PS/PSV; 集量論) と PST のチベット訳に見出される VVi の断片を組織的に回収し、既に回収していた Nyāyavārttika (= NV) からの断片と合わせて VVi の全体像の再構成を試みた。その際 VVi の後半の大部分を占める誤難論の叙述は PSV と PST の第 6 章に見出される VVi の断片に基づいて再構成されたが、梵文原典を欠く資料的制約から不完全な部分も残っていた。本発表では、梵文 PST 第 6 章の研究成果に基づき、フラウワルナー博士の断片同定における誤認・過不足を指摘し、解釈上の誤解の修正を提案した。また『如実論』と VVi の誤難論の詳細な比較検討を行った。更にディグナーガの VVi 批判を分析し、ヴァスバンドウとディグナーガの誤難論の相異を明らかにした。

室屋安孝 (オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所研究員) 「『因明正理門論』と『集量論』の比較」

本発表は、PST 写本の校訂と解読に基づく PSV の再建と解読が先行研究で蓄積された『因明正理門論』 (= NMu) 理解にどのように貢献できるのかについて、その方法論と若干の事例を論じた。まず、NMu の最終詩節の「開智人」と「慧毒薬」の比喻を再考し、PST で言及される対論者の解釈を手がかりに、「毒の除去」を前提とする先行研究の理解と還梵に修正の余地のあることを指摘した。次に誤

難論に関わる NMu 第 19~28 偈について PS 詩節との対応関係を分析し、対応パターンの 4 類型を確認し、PS 詩節の還梵を提示した。さらに NMu の「同法相似」を精査し、sama の語の解釈をめぐってなされる PST の説明を介して、NV の叙述の中に未同定の NMu の並行部分を指摘し、更に NV が NMu の文を引用している可能性も示唆した。以上により、PST 第 6 章の梵語原典資料が今後の NMu の「再発見」に果たす豊かな学術的意義が示された。

渡辺俊和（オーストリア科学アカデミー アジア文化・思想史研究所研究員）『集量論註』における文献学のおよび思想史的問題』

本発表はディグナーガの誤難論の展開と後代に与えた影響について、nyūna と jāti という語の意味、誤難と正難との関係の 2 点から検討した。ディグナーガは nyūna の意味について NMu では『ニヤーヤスートラ』の「論証支の欠如」という解釈を踏襲したのに対し、PS では第 6 章で同じく「論証支の欠如」と解釈する一方、第 3 章では「証因の三条件の欠如」という新解釈を提示する。この解釈の並存はダルマキールティに引き継がれたが、8 世紀以降の仏教徒はこれを「三条件の欠如」として統一的に理解しようとした。次に jāti は NMu では「擬似的論難」と解釈されたが、PSV ではより広い概念として扱われている。PSV と NMu では反駁が立論者による原立論と共に等しく妥当な結論を導く、あるいは等しく妥当な結論を導かない場合に正難とされ、反駁と原立論の等価性を正難の条件としている。PSV は 14 の誤難に共通する「相似」(sama) という表現の説明のためにこの「等価」の概念を用いる。PSV は種々の相似を一義的に誤難とは考えない。これは相似を正難とした『方便心論』の見解とも通底する。

まとめ

3 者の発表後、桂紹隆教授よりコメントが寄せられ、続けてフロアを交えて活発な討議が行われた。なお 3 発表の詳細な内容は近日中に他雑誌に公表の予定である。

本パネルは、PSV と PST の第 6 章の研究の紹介に留まらず、PSV と NMu の研究への方法論的寄与、ニヤーヤ学派の論理学との関係の解明、ディグナーガ以前の仏教論理学文献の思想史的位置づけ、さらに後代の中国・日本因明の研究への新視点の提供、といった多様な成果を生み出した。今後、科研費基盤研究 B 「インド仏教論理学の東アジア世界における受容と展開——因明学の再評価を目指して——」(代表者・護山真也博士)とも共働しつつ、ディグナーガに至る仏教論理学とその解釈史(因明)の研究を推進してゆく所存である。